

えどのさんけいこう

#37 江戸の参詣講—挑灯と講中札にみる霊場

信仰—

作者：秦野市（はだのし）

刊行：平成7年（1995）



📖 解題

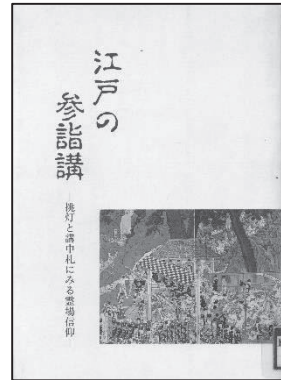
■ 内容

「講」とは、宗教・経済・社交上の目的を達成するために組まれた結衆集団のことである。もともとは仏教上の用語から発したものであるが、近世に入ると、交通網が発達したことで、聖地巡礼や社寺参詣が盛んになり、そのために参詣講の結社組織が作られた。この参詣講は、旅費を積み立て、講の代表を順番に送り出す代参形式が多く、目的の社寺名をかかげて、大山講、伊勢講

などと称した。「講中札（こうちゅうふだ）」は、各講が参詣に赴くにあたって作成し、その途中で宿泊した旅籠屋や御師の宿坊などに掲げられた標札で、裏面には参詣した年代や、世話人などの名前が記されている。

本書は、「資料」と「解題」から成る。「資料」は、全89丁で、176の参詣講で使用されていたと思われる14の挑灯と167の講中札が掲載されている。講中札は、資料半丁の中央に境界線を引き、右側に講中札の表側、左側に講中札の裏側の記載が、左右に分割するかたちで書き留められている。講中札と挑灯は、文様部分だけが朱色で彩色されている。また、講中札、挑灯の下には、そこに書かれている文字の翻刻が掲載されている。

「解題」には、この資料の構成や、それぞれの参詣講についての説明が



[K38.63/21]

第4章 民俗

記載されている。「解題」によると、この資料に掲載されている176の参詣講は、霊場別にみると、大山、江之嶋、富士山、片瀬山瀧口寺、川崎大師などがあり、そのうち最も多いのは大山講で、数にして89講とその51%を占めている。

なお、本書の「資料」は、題簽の跡だけを残し、題簽を欠いた状態で秦野市が古書店から入手し、「江戸諸講中挑灯講中札控帳」（仮題）として、秦野市が公表したものである。この資料に関する経歴については不明であるが、資料の作成時期は、資料年代の記載から文化十年頃と推定されている。

■ 作者

本書に掲載されている「資料」は、経歴が不明であり、その作成者もはっきりとはわかっていない。しかし、資料の冒頭に掲載されている挑灯に書かれた「大谷徳治」または、二番目に掲げられている「若松屋喜兵衛」が作成者なのではないかと考えられている。

「解題」の執筆者である松岡俊（まつおかたかし）は、産業能率大学情報マネジメント学部教授。著書に、『絵はがきに見る寒川の近代 寒川町史調査報告書 12』（寒川町 2002）、「相模大山御師の形成と展開」（『伊勢原の歴史』第7号 1992）等がある。

参考文献

西海賢二「相州大山講と蓑毛御師」（『立正史学』第57号 立正大学史学会 1985）

『秦野市史 別巻 3 民俗編』秦野市 1987 [K21.63/4/2-3]

『山岳修験 第18号 研究発表論集』日本山岳修験学会 1996 [K17.64/45]

『伊勢原市史 別編 民俗』伊勢原市史編集委員会編 伊勢原市 1997 [K21.64/7/3-1]